

“VERITAS Enterprise Vault™”を活用した Eメールアーカイブソリューション

企業において、Eメールは必要不可欠なビジネスの中核システムになっている。また、ビジネスにおいて何らかの問題が発生した場合において、Eメールデータは、証拠となり得る電子データとなる。それゆえに、Eメールデータの削除が、近年不可能となってきており、このEメールデータの保存について何らかの手法を取り入れなければ、システムリソースへ大きな影響を与える要因ともなっている。ペリタスソフトウェアはこうした状況を受けて、Eメールのアーカイブ(格納)に効果的な「VERITAS Enterprise Vault」を提供している。本稿では、Eメールアーカイブの重要性とそれに対するペリタスソフトウェアの取組み、「VERITAS Enterprise Vault」の製品解説、同製品の事例を紹介する。

企業活動の証拠となるEメールデータ管理には データアーカイブソリューションが最適

データアーカイブソリューションが 注目される3つの理由

情報ライフサイクル管理を基にしたデータアーカイブソリューションが注目されている。その理由は、主に次の3つがある。

1つ目の理由として、米国で大手企業による不正会計などを契機に、新しい法律や規制が制定されている。具体的なものとして、証券取引に関する規制や企業改革法、医療保険の責任に関する法律などがある。これを受けて我が国でも、個人情報保護法の施行が実施され、これらの規制では、データを保存するだけでなく、確実な廃棄や、一定期間データが検索可能であることや、改ざんされていないことの証明を義務付けている。個人情報保護法の施行により、Eメールを媒介としたデータの流失を防ぐために、メールの送受信に関する履歴データの保存が必要となっている。

2つ目の理由として、企業におけるEメールのデータ量の急増であ

る。メッセージングサーバーやファイルサーバーでは、常時利用されているデータは全体の20%、利用されていないデータが80%を占めるといわれている。利用されないデータの保存は、単にストレージを専有するだけでなく、変更のないデータもバックアップしなければならず、管理コストの増大を招くことになる。

3つ目の理由として、Serial ATA技術の登場により、ディスクストレージの低価格が加速している。このため今までテープに限られていた大容量のデータアーカイブ装置として、より管理が容易なディスクを利用することが現実的になってきた。

バックアップとアーカイブの違い

バックアップとアーカイブの相違点について、いまだIT管理者は曖昧な取扱いをしている。

・バックアップデータ

万が一の障害時にデータを現状

に戻せるように待避させたデータであり、常に最新の情報に保っておくことが重要となる。一般的に世代管理をもとに運用されており、最新の世代は過去の世代データへの上書きが可能となる。

・アーカイブデータ

データ自身変化することなく長期の保存保管が必要。上書消去が不可能となる企業において重要となるデータ。

日本ではこうしたアーカイブの手法が浸透しておらず、大半がバックアップ手法を採られている。

Eメールアーカイブの重要性

医療関連や決算情報など、重要度が高く不変である要素を占めるのは間違いなくEメールデータである。客先からの反応などが変わらず、企業活動の証拠として残す必要がある。

しかし前述のように我が国のデータ管理は、アーカイブとバックアップのデータが混在しているのが現状である。そこで、Eメールのデータを一つの手法で取り出せること、ダウンタイムを少なくすることの2つ



ベリタスソフトウェア㈱
エンタープライズ営業本部
第二営業部
シニアアカウントマネージャー
石田 喜明氏

が、ビジネスにおけるEメールデータの汎用性を考えることが重要となってくる。Eメールをアーカイブするメリットとして、次のようなものがある。

- ・ハードウェアリソースの有効活用
- ・Eメール運用管理作業軽減
- ・Eメールデータのバックアップ作業軽減
- ・Eメールソフトウェアのバージョンアップ時における作業軽減
- ・コンプライアンスに対応可能

Eメールのアーカイブを支援するソリューションの必要性

Eメールアーカイブソリューションにはリスク回避を行う管理ソフトウェアが必要である。企業のEメール管理を担当している場合、保存しているEメールの増加や、古いデータのアーカイブにも対応しなければならない。IDCの調査によれば、企業が保有するEメールのデータは年々増加しているという(図1参

照)。また、アーカイブするデータ、アーカイブ先のメディア、時間、方法などの一定の基準を策定できる機能も必要となる。ポリシーベースの管理は、アーカイブプロセスの自動化を可能にし、業務効率の向上につながる。また、アーカイブソリューションには、Eメール以外の構造化されていないデータにも、対応できることが求められている。

「重要なのは、いかなる企業でも管理するデータ毎に、適切なアーカイブポリシーを策定し、システムに反映させることです。構造化されていないデータに対しては、ハードディスクのビット単価が数年前と比較し、安価になったとは言え、不必要なデータをディスク上に長期に渡り放置する事は、万が一のシステム障害時におけるシステムの復旧時間に影響を与えるだけです。また、バックアップに必要となるリソース(Tape、ハードディスクの容量等)、運用管理コスト(バックアップ時間の短縮、管理対象となるリソースの極小化を実現)に対しても悪影響が

でてしまいます。これらの、デメリットを解消する上でも構造化されていないデータに対してもアーカイブが必要となります。Eメールデータの管理においては、

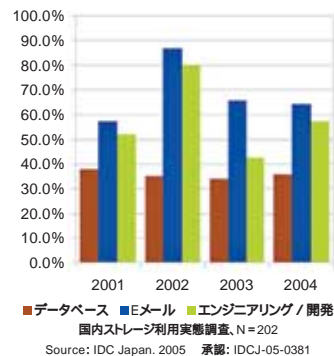


図1 アプリケーション別データ保有量の伸び率

長期保存が的確に行えることとデータが改ざんされないことが重要となります。」(ベリタスソフトウェア㈱エンタープライズ営業本部 第二営業部 シニアアカウントマネージャー 石田 喜明氏)

ベリタスソフトウェアの製品で ヘテロジニアスな環境を実現

ベリタスソフトウェアの製品群の大きな特徴は、図2に示すように、データアーカイブだけでなく、ストレージリソース管理やデータの保護まで企業における重要なデータすべてをカバーできるヘテロジニアスな環境が実現できることにある。

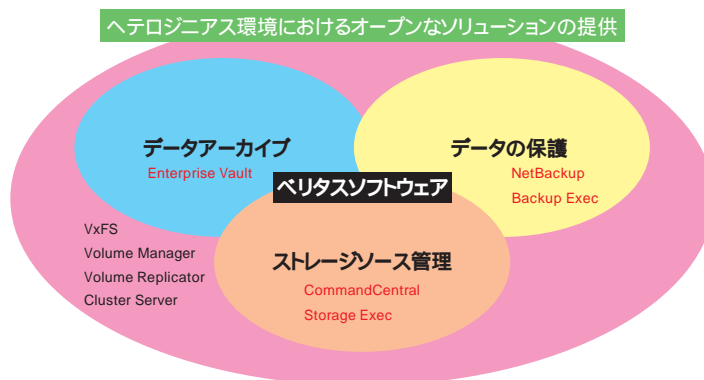


図2 ベリタスソフトウェアのアーカイブソリューション

「VERITAS Enterprise Vault™」の 優れた機能と特長

バックアップ/アーカイブ/ストレージ管理を統合して非構造化データを効率的に活用

VERITAS Enterprise Vault は、柔軟性の高いソフトウェアベースのアーカイブ フレームワークにより、Microsoft Exchange サーバー、SharePoint Portal サーバー、IM、ファイルサーバー環境内のデータの検出を可能にすると同時に、ストレージ コストの削減と管理の簡素化を実現している。これにより、コンプライアンスへの対応やデータ検出、ストレージの最適化、運用効率の向上、知識開発、マイグレーションと統合化といった様々な問題に付随する、ビジネスと IT のリスクを軽減することができる。以下、具体的な機能とメリットについて紹介する。

【ストレージ機能の最適化】：VERITAS Enterprise Vault は、Microsoft Exchange サーバーをサポートしている。Inbox の古いメッセージを、ポータルに移動し Inbox のサイズを最適化できる。Inbox のサイズを削減することで、Exchange サーバーの負荷を低減しパフォーマンスを向上させる。ポータルに移動したメッセージはショートカットに置き換わり、ユーザーはショーカットを使って、いつでもアクセスすることができる。リトリブはユーザーから透過的なので、口

ーカルに存在するデータか、ポールのデータかをユーザーは意識せずに利用することができる。

【マイグレーション】：個人のデスクトップやファイルサーバー上に保存している PST ファイルを、ポータルに移動し、一元管理することで、管理コストを削減し、予期しないデータの喪失・漏洩を防ぐことができる。さらにシングル インスタンス ストレージ機能により、複数の PST ファイルに含まれる同一のデータのコピーを1つだけ保存するので、トータルのストレージ容量を大幅に削減することができる（図3参照）。

【効率的な運用】：Enterprise Vault を使うと、1台の Exchange サーバー が実際に保持するデータ量が大幅に削減できるので、複数の Exchange サーバーを統合することが可能になる。統合によって運用管理が容易になり、管理コストが削減

できる事に加えて、圧縮機能とシングルインスタンス ストレージ機能によって、複数のサーバーで運用している場合に比べ、トータルのデータ量を削減することが可能である。

【シームレスな情報共有】：Enterprise Vault は、Exchange サーバーのバージョン アップグレード時に導入すると非常に効果的である。Enterprise Vault は、Exchange サーバー 5.5、2000 および 2003 をサポートしているので、旧バージョンを利用中のユーザーのメッセージを、まずポータルに移行することができる。後で Exchange サーバーを 2003 にアップグレードしても、ユーザーはポールのメッセージにシームレスにアクセスすることができる。稼働中の Exchange サーバーへの負荷が最小限に抑えられるため、移行の障壁を大幅に下げることが可能となる。

この他、強力な検索エンジンを搭載しているので、ユーザーはアクセス権があるすべてのデータに対して、詳細な条件検索をすることが可能である。

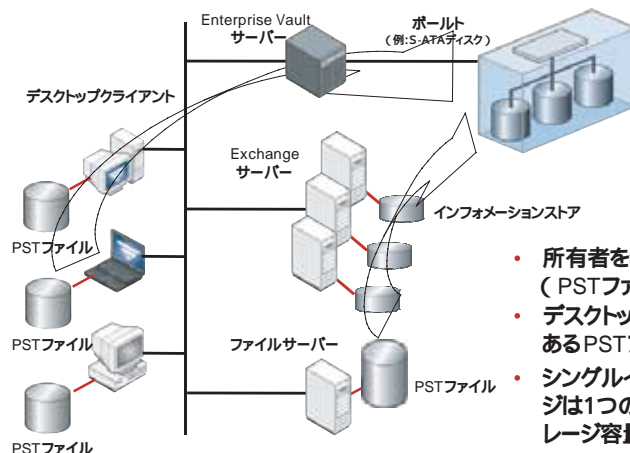


図3 Enterprise Vault の PST マイグレーション機能

「VERITAS Enterprise Vault」の様々な事例

事例1 : Libertel-Vodafone

Eメールのデータ管理のためにExchangeとEnterprise Vaultを並行して稼働

ボーダフォングループの傘下にある、オランダの携帯電話事業大手の「Libertel-Vodafone」は、300万人の加入者と2,000ヵ所以上の送受信局を有し、現在オランダの国土の99.4%を網羅している。同社はEメールが日々の事業運営のバックボーンの一部となっていたが、ユーザーの保存するメッセージの増加により、システム管理者がそのメッセージフォルダの消去に多くの時間を費やしていた。そこで同社は、社内のEメールをサポートするため、ベリタスソフトウェアのEnterprise Vaultに注目した。Libertel-Vodafone社は1年間ExchangeとEnterprise Vaultを並行して稼働し、その後前システムから1ヵ月で移行することができた。同社はこの機会にExchangeとEnterprise Vaultの両方についてユーザー研修を実施している。

Libertel-Vodafoneでは現在、社内の主な業務に係わる350人のユーザーにEnterprise Vaultを配備しており、オランダ中の4,000人の担当者全員向けに某社のハードウェアをロールアウトしている。Enterprise Vaultとベリタスソフトウェアの専門知識が結びつくことにより、Microsoft Exchangeの利用に対して、非常にスケラブルで信頼性の高いシステムとなっている。Libertel-Vodafoneが年々成長を遂げるに従い、Enterprise Vaultは、データ量を削減し、ユーザーの要件に応じてより適切な計画を立てるために非常に役立っている。また、障害が発生したときのExchangeのバックアップおよびリストア時間が短縮されたのもEnterprise Vaultが活用されたからこそである。

事例2 : Sony UK Ltd

ソニーUK社にEnterprise Vaultをパイロット導入

Sony UK Ltdは、世界で8万人以上、イギリスで1,200人の従業員を擁し、イギリス事業部門は、同社の販売およびマーケティングを手がけ、同社のすべてのコンシューマ商品の販売およびサポートのほか、ISサポートを行っている。

このような大規模な会社では、Eメールが全社的に社内及び社外コミュニケーションの不可欠な手段となっている。しかし、Eメールや添付文書のボリュームとサイズの両方が急速に拡大していたため、UK社IT部門では、Eメールシステム内に保存されている顧客データと企業データを管理するより適切な方法を見出し、PSTストレージに伴うリスクをなくして、Microsoft Exchangeの総合的な信頼性を向上させたいと考えていた。さらに、添付文書の有無にかかわらず、Eメールそのものもサイズが拡大しているという問題も発生していた。

そこで2001年始めに、Sony UK LtdのIT部門は徹底市場評価に乗り出し、ベリタスソフトウェア製Enterprise Vaultを含む、3つのメール管理ソリューションを検討することにし、4ヵ月間という短期の試験導入を実施した。

Sony UK LtdがEnterprise Vaultを選んだ理由は、エンタープライズレベルのデータをセキュアに処理し、総合的なストレージの要件を縮小できるという点にあった。試験導入後は配備がスムーズに進み、ユーザーから完全にトランスペアレントで、サービスを中断させることが全くなかったという。

現在では、Enterprise Vaultがコンシューマ事業部の1,200人に配備されており、PST専用のサーバーを1台再配備し、ファイルサーバーとして社内全体での情報共有が可能となった。